

多文化共生社会づくり推進事業（(特)保見ヶ丘ラテンアメリカセンター）

たぶんかきょうせいしゃかいづくりすいしんじぎょうほうこくしょ 多文化共生社会づくり推進事業報告書

1 委託業務名・概要

- (1) 業務名 「Cantinho Do Saber カンチーニョ ド サベール」(学びの場)
- (2) 概要(事業の要約・事業の目的など)
豊田市保見団地とその近隣の日本の公立小中学校に通うポルトガル語・スペイン語を母語とする児童・生徒が、学校の授業についていけるように支援するとともに、母語・母文化を学ぶ機会を提供するために、放課後にこれらの児童・生徒を受け入れ、学校の宿題の補助、ポルトガル語・スペイン語の学習支援、母語の歴史・地理学習支援を行った。

2 実施事業について

実施時期

- (1) 平成19年7月1日(日)～平成20年2月29日(金)

(2) 実施地域

豊田市保見ヶ丘(保見団地を中心に)

(3) 事業の具体的内容

・学校の宿題補助

実施時期 平成19年7月1日～平成20年2月29日

実施場所 保見ヶ丘ラテンアメリカセンター内 学習室

実施対象 豊田市保見団地とその近隣の日本の公立小中学校に通うポルトガル語・スペイン語を母語とする児童・生徒

実施回数 155回(小中学校の登校日、および夏休み、冬休み)

参加人数 2007年7月1日～31日まで 30名

2007年8月1日～2008年2月29日まで 16名

豊田市立東保見小学校・西保見小学校、三好町立三好ヶ丘小学校に通う児童が、放課後、担任教諭からその日に出された、計算ドリル、漢字ドリル、音読、プリント

などの宿題をするのを補助した。

参加児童は、放課後来所し、自ら進んで宿題を始めた。学年や学校も異なるため、それぞれの宿題を個別に指導して、つまづきがないかチェックした。

音読に関しては、低学年の児童はたいへん意欲的に取り組むことができた。

なお、中学校生徒へも参加を呼びかけてきたが、部活動が影響してか、まったく参加がなかった。

・ポルトガル語(スペイン語) 母語の地理・歴史の習得

実施時期 平成19年7月1日～平成20年2月29日

実施場所 保見ヶ丘ラテンアメリカセンター内

多文化共生社会づくり推進事業（（特）保見ヶ丘ラテンアメリカセンター）

実施対象 豊田市保見団地とその近隣の日本の公立小学校に通うポルトガル

語・スペイン語を母語とする児童・生徒

実施回数 155回（小中学校の登校日、夏休み・冬休み）

参加人数 2007年7月1日～31日まで 30名

2007年8月1日～2008年2月29日まで 16名

日本語の学習支援に引き続き、ポルトガル語の授業を行った。ほとんどの児童が、多少の日常会話はできるものの、アルファベットでの読み書きができず、ポルトガル語の基本語彙も理解できなかったことから、具体的な絵図が書かれたプリントを使用して、丁寧に学習支援を行った。

さらに、2008年に入ってから、NHK制作のブラジル移民のドラマ「ハルとナツ」を利用して、移民の当時の様子を知るなど、ブラジル移民100周年を意識した取り組みを行っている。

・パウロ・フレイル地域学校の学習発表会やイベントへの参加

実施時期 平成19年9月～平成20年2月

（12月15日クリスマス発表会を含む）

実施場所 学校および豊田市立保見交流館

実施対象 カンチーニョ児童

実施回数 3回

参加人数 各16人

母語・母文化の理解については、インプットだけでなくアウトプットも非常に重要となる。そのため、本事業参加児童をブラジル人学校の学習発表会やイベントに参加させることで、習得した母語や知識をアウトプットする訓練を行うこととした。

学習発表会に参加するためには練習する必要があり、練習を通して、児童に母語や母文化を自発的に身構えずに習得させる事を狙いとした。

・西保見小学校・東保見小学校との連絡・意見交換会

実施時期 平成19年7月3日～2月26日

実施場所 東保見小学校および西保見小学校

実施回数 東保見小学校 毎月1回 計7回

実施日 7/3、9/4、10/2、11/20、12/19、1/30、2/26

西保見小学校 毎月1回 計7回

実施日 7/6、9/7、10/5、11/13、12/11、1/22、2/19

両小学校の国際担当の先生方と連絡会を開き、児童の下校時刻の確認や下校時の安全などについて確認するとともに、丁寧に児童の学習状況や学習・生活態度について、意見を交換した。

多文化共生社会づくり推進事業（（特）保見ヶ丘ラテンアメリカセンター）

・保護者会および保護者相談

実施日時 保護者会 平成19年11月3日
保護者相談 平成19年7月1日から平成20年2月29日にかけて、随時実施した。

実施場所 保見ヶ丘ラテンアメリカセンター内

実施形態

パウロ・フレイレ地域学校の昼間の全日制的保護者会にあわせて、土曜日に実施した。保護者には、教室での児童の様子を伝えるとともに、保護者からは家庭でのポルトガル語の使用状況や、児童のポルトガル語の上達について、聞き取りを行った。

一方、保護者が迎えにきた時に、児童の帰宅準備ができるまで、主として校長がほぼ毎日入口で保護者との情報交換を行うとともに、問題が生じた場合は、その場で保護者の相談に対応した。

3 実施結果(実施の効果等、数値を入れるなど具体的に)

・学校の宿題補助

学校での学習活動の疲れがあると思われるが、おやつを食べたのちに、すぐに自発的に宿題を始め、黙々と宿題に取り組む姿には、常に感動させられ、スタッフは励まされた。外国人児童の日本語学習を補習するためと思われるが、学校の担当教諭が毎日出す音読みの宿題も、嫌がることなく積極的に何回も読む姿が見られた。

これらの結果、ほぼすべての児童が、8ヶ月間に日本語能力を伸ばし、学習に自信をつけたように見受けられる。児童が通う小学校の国際担当の先生方との連絡・意見交換会でも、先生方から、児童の多くが自信を得て、良い方向に向かっているとの高い評価を得た。

・ポルトガル語（スペイン語）母語の地理・歴史の習得

多くの児童がポルトガル語を勉強し始めて間のなかった7月頃は、ポルトガル語学習に対して消極的な態度が見られたが、ポルトガル語の学習が進むにつれて、保護者とのコミュニケーションにも進展が見られるなど、変化が現れ、態度も積極的なものへ変化してきた。

・パウロ・フレイレ地域学校の学習発表会やイベントへの参加

12月15日に開催されたクリスマス学習発表会では、ブラジルの伝説の鳥に関する劇に参加し、堂々と歌を歌う姿が見られた。この発表会の後、進んで母文化の勉強をしたり、母語を積極的に活用する児童の姿が増え、インプットだけでは得られない学習成果が見られた。また、学習発表会には多数の父母が見に来ており、自分の子どもの成果を確認でき非常に好評であった。

多文化共生社会づくり推進事業（(特)保見ヶ丘ラテンアメリカセンター）

・西保見小学校・東保見小学校との連絡・意見交換会

児童の学習や生活に関する意見交換を定期的に行うという点で、たいへん意義深いものとなってきているだけではなく、意見交換のなかで、学校・地域の連携のあり方や役割分担等についての貴重な意見交換が行われた。

このなかから、バイリンガルを学校と地域の連携で育てるという、「地域バイリンガル教育プログラム」という新しい考え方が生まれた。

・保護者会および保護者相談

児童が少しずつポルトガル語を学び、家庭で話し始める姿を、保護者が一番喜んでいたようである。保護者会では、まず第一に保護者のよこぶ姿が目についた。また、日本語学習支援だけではなく、またポルトガル語だけではないという、本事業の特徴であるバイリンガル教育にも理解が深まったように思われる。

日常的な保護者との情報交換などもまた、大きな意味があったように、思われる。保護者の困難な生活や帰国・滞在の意志など、日常的な会話を通じて、児童の学習意欲や学習環境を知ることができた。

4 事業の特質(工夫した点などを事例を挙げて具体的に)

・日本語学習支援においては、児童の自発性と意欲を尊重して、無理して学習意欲や関心を失ったりすることのないように努めた。宿題のやり方・順番、どの程度やるかも、基本的に自分で考えさせ、それを尊重した。その結果、わからないところがあれば必ず質問して解決する、また、音読は必ずチェックしてもらうなどの習慣が児童全員に身についた。こうした習慣が、学校での学習態度にも影響を与えていると思われる。

・日本の小中学校では、母語のポルトガル語で話すことが高く評価されにくいことから、積極的に自らポルトガル語を話そうとする児童は少なかった。そのため、ブラジル人であること、ポルトガル語を話すことに自信をもつという、自己肯定観をもてるように、日本人スタッフが積極的にブラジル文化やポルトガル語への理解を深める努力を行った。その結果、多くの児童から、初期にはほとんど聞かれなかったポルトガル語会話が聞けるようになった。

5 今後の課題等

・地域の中学校に通う生徒からも問い合わせがあり、夜間の補習教室も開かれることとなった。平日の午後4時から6時まで実施してきたが、中学生や高校生のための夜の補習教室や土曜日の補習学校の開設も視野に入ってきた。

多文化共生社会づくり推進事業（(特)保見ヶ丘ラテンアメリカセンター）

- ・ 知立や岡崎など、他の遠方の地域からの問い合わせも増えており、母語保障や日本語学習支援が求められていることがわかった。こうした遠方の児童・生徒への対応を検討する必要があると考えている。

6 その他参考事項

- ・ 7月末から、想定していなかったスタッフの退職などにより児童の送迎ができなくなってしまったことから、30人いた児童が16人に減少した。そのため、スタッフを補充したが、教室の運営には不慣れなためにスタッフの育成を図りつつ、教室運営の質を落とさないように既存スタッフが頑張りを見せた。新規スタッフが教室運営に慣れ、教室の規模を拡大できるめどがたった昨年12月から、両小学校に相談し、補習教室の案内を学校を通じて保護者に届けるなどの工夫を行い、2月に入ってから問い合わせ等も増えて、新年度4月以降の入校予定者を5名ほど確保できた。
- ・ 保見ヶ丘ラテンアメリカセンターの地域情報紙「インフォルマチーボ」に児童募集のお知らせを載せて、地域に全戸配布した。
- ・ 豊田市立保見ヶ丘交流館の竣工記念「ふれあいまつり」にパウロ・フレイレ地域学校の太鼓グループ「光太鼓」が参加して演じた。
- ・ 12月15日にクリスマス発表会を実施し、ブラジル・ニッケイ新聞に掲載された。
- ・ 豊田市国際交流協会が実施するブラジル移民100年を記念した市民活動助成事業に、パウロ・フレイレ地域学校主催事業「ブラジル移民100年記念誌の発行と学習発表会」を申請中である。「カンチーニョ・ド・サベル」の児童・生徒も参加する予定である。